

のか、悲しいかな小説も長編は面倒臭い次第です。卒論は永久貸し出し可能とかで早速手続きを取り製本に出しました。書き終った当座はこうも、ああもと気がかりであったのに、製本が出来上ったときは氣恥ずかしくなって今ではカバリーをしてあります。今でも古本屋へ行きますが鷗外を捜している学生に逢うと話を聞いて見たくなります。講演会に出かけることもあります。全集もやっと出版されましたが今はそちらに目を向ける余裕もなく図書館でながめています。テーマにそつて本を読むことは生活の中では中々出来ないことだらうし、まして原稿用紙に字を埋めることとなると益々出来ません。この機会に卒論と学生生活とそして片桐先生が改めて思い出され、本を読まねばと力んでいる次第です。

〈漱石の女性論〉

第一回卒業 岡崎 智子

卒論とは懐かしいことばである。ほんの少しの満足感と、かなりの後悔の念を沸きたたせながら、学生時代を思い出させてくれる。ところで、私の卒業論文は、「漱石の女性論」という題目であった。

高校時代から夏目漱石に魅せられ、それがもとで国文学科に入学したのであるから、漱石を選ぶことに何の迷いもなかった。その上いつの頃からか、歴史上の女性を初めとして、女性に対する興味を強くいだいていたので、漱石の作品の中に登場する女性について考えてみようということも、さほど時をかけずに決まったように覚え

ている。とはいえ、漱石と女性を、どう結びつけるかには、かなりの時を費やした。

漱石が小説家となった後に書いた一連の小説は、それぞれ 独立したテーマを持つ一つの作品であるが、同時に、各作品は互いに強い関連を持つている。その上、テーマの変遷、深まりが、全て、恋人、或いは夫婦といった、男女間に展開されていることを考えると、女性像の変遷という観点からも、作品を捉えることができるのではないかと考えられた。こうして、卒業論文の内容の目やすは決まった。

何とかテーマを決め、何度も作品を読み返し、資料作成をしなから、参考書を捜しに古本屋や図書館を歩き回ったものの、人が手につけていないものを選んだのであるから、目立つものがある訳はなく、悪戦苦闘しながらも、どうにか縮切りぎりぎりに、百余枚の論文を書きあげた。

今にして思えば、自分の力量も知らず、ずいぶんと生意気だったとは思うが、それ迄の研究者が、余り触れていない分野をと、意気込みは素晴らしいものであった。だが、卒論ということばを聞くと、多少、後めたい気持ちになる所以は、このあたりにあるのではないだろうか。

その後、漱石の女性論を特集した書籍、雑誌などが、多数眼についてならないが、買い求めるだけで、棚に眠っている。忙しきにかまけて、読む時間がないとも言えるが、最大の理由は、我が卒業論文の、浅薄であることを悟らされるのがこわいのである。

そうは思っても、卒論とは、やはり愛着が強く湧くものなのであろう。私は、漱石とその女性像という問題を、じっくりと時間をか

けて考え、自分なりに満足のいく論文を、いつかは完成したいものと、今になって心の隅に思い続けているのである。

△万葉集における自然観△

第一回卒業 嶋田 千枝子

北風がスモッグを払い、青空が東京の街に返って来たそんなある日、思いがけない理由で卒業論文を手にする事になりました。本箱の中から包装紙に包まれた卒論を取り出して、少々照れながら読み出す内に、四年前の十二月も半ばを過ぎてメ切りの日が迫り、連日徹夜をしていた頃が懐しく思いおこされてくるのでした。

私は橋本達雄先生のゼミを受講して、万葉集の自然観を卒論に選ぶことにしました。本来は万葉の精神、倫理という観点から歌を扱って見たかったのですが、上代の日本人がいかなる精神で、いかなる生活を、何を生甲斐にして何を考えていたのか、そんな点に興味を覚えていたからでした。しかし、それだけの問題を扱うことは国文科として、又自分の能力において不可能なことはわかりきっていたので、その一断片である万葉の自然観に焦点を絞ったわけです。たとい僅かでも万葉の精神に触れることができたらと思い、「叙景歌の変遷を通して」という副題をつけてやっと方針が決まりました。結果としては自然観そのものより、叙景歌の変遷ということに終始して、つい自然観の方が疎かとなってしまいました。何とか自分なりに僅かではありましたが万葉人の心境に触れることができたような気がしました。そして、最終的には「自然へのおもいや

り」こそが日本人の自然観ではないだろうかと結論づけました。

ともあれ、卒論をまがりなりにも書けたということは、私にとつて生涯の思い出となったと共に、もし卒論がなかったら学生と言えような勉強をはたしてしたであろうかと今になって思う次第です。「卒論を書く」という気構えで講義を聴き、本を読み、やがて調べてみたいところや興味をおぼえたところが出て、それを卒論のテーマとして資料集めを始めました。暑い中を朝から国会図書館で並んだり、神田の古本屋街を一軒一軒捜し歩いたり、又夏休みは万葉の故里を旅したり、あらゆることが血となり肉となって自分の書くべきことが自然とわかってきました。資料としては当然第一に万葉の歌で、カードを使用し分類して「神と自然」との関係は夏休みが終るまでに書き上げて、それから本論に入ることができました。それでも軌道に乗って卒論と言えるものになるまでにはかなりのあせりと不安がありました。

そうこうしている内にメ切りの日がやってきました。朝方になってやっと書き上がった卒論を胸に抱き友と大学へ向いました。事務局へ提出したらさぞすっきりするだろうと思いきや、いざ出してしまふと何の感動もなかったのです。しかし、これで今日から自由とばかり、先ず飢えと寒さと睡眠不足をなんとかしようと、友と乾杯しました。レストランで温い食事と果実酒、そして熱狂的なフラメンコにすっかりいい気持になって、ついうとうとしてしまった程でした。卒論をやっと書き終えたという実感を心身共に感じたのでしようか。やはりこの日の事は忘れられませんが。

卒論の思い出というより経験談みたいになってしまいました。それぞれが懐しくつい余計なことまで書いてしまいました。